

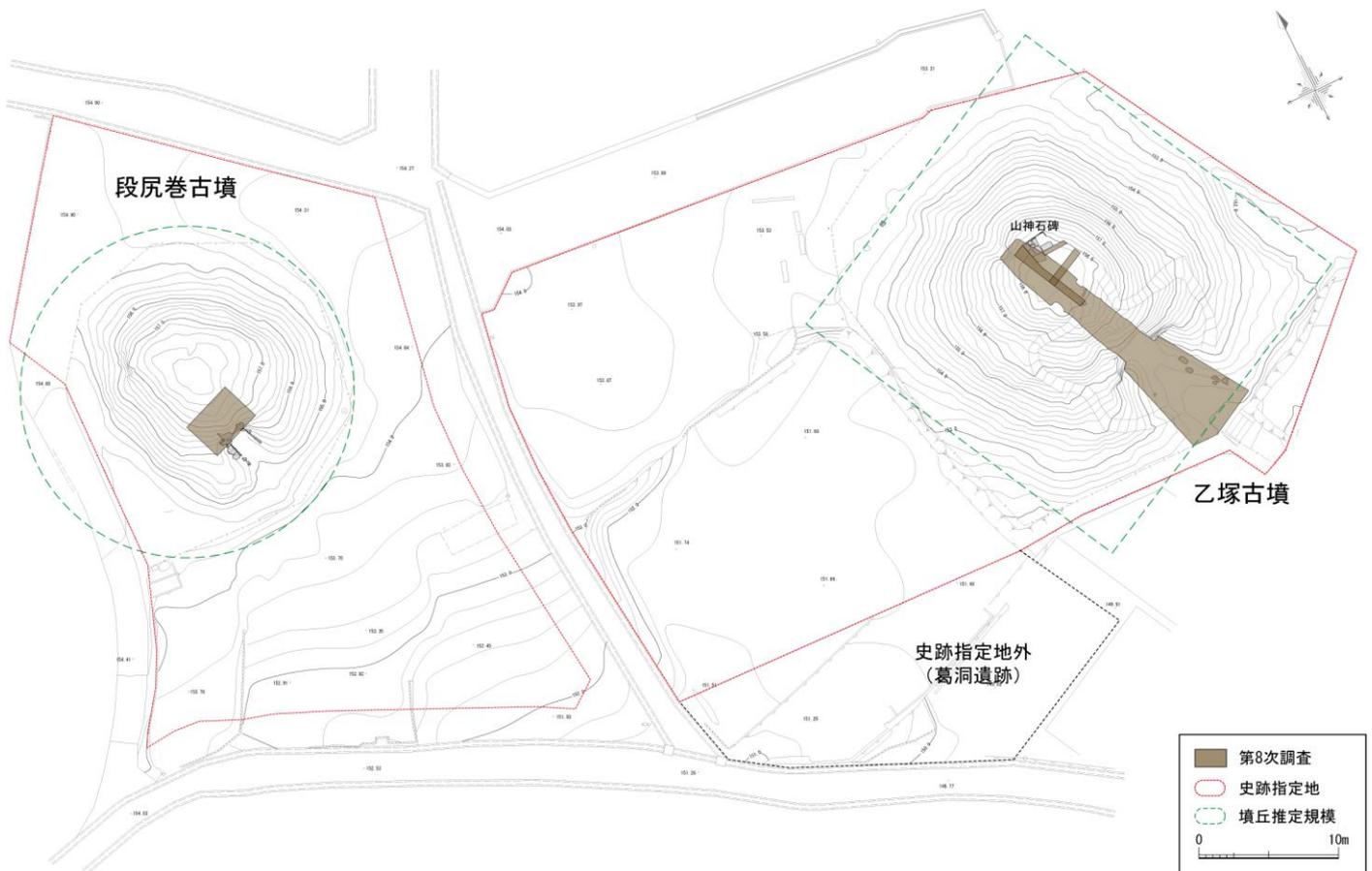
【発掘調査概報】

国史跡乙塚古墳附段尻巻古墳 第8次発掘調査

所在地 岐阜県土岐市泉町久尻字勝負及び段尻巻地内 [\(詳細地図はこちら\)](#)

◆遺跡の概要

乙塚古墳(おとづかこふん)は、美濃地方最大級の横穴式石室を持つ方墳で、当時の首長の墓と考えられます。隣接する段尻巻古墳(だんじりまきこふん)は円墳です。両古墳は、美濃地方の後期古墳を考える上で非常に重要な古墳とされ、昭和13年に国史跡に指定されました。いずれも7世紀前半の古墳です。[\(周辺の遺跡はこちら\)](#)



調査位置図



段尻巻古墳 (調査前)



乙塚古墳 (調査前)

◆発掘調査の経緯

今回の調査は、土岐市が進めている両古墳の保存整備事業に先立つ調査として、市より委託を受けた土岐市文化振興事業団によって実施されました。乙塚古墳では、墳頂部の現状確認、および石室内から前庭部にかけての床面と側壁の状況確認を行いました。段尻巻古墳では、羨道天井石の修復作業が予定されているため、その事前準備として盛土の除去と現状確認を行いました。

・・・乙塚古墳の発掘調査・・・

令和元年5月13日から7月23日にかけて発掘調査を行い、8月28・29日と9月5日に部分的な追加調査を行いました。

【墳頂部の調査】

墳頂部北端にある山神の石碑以外に遺構は検出されませんでした。近代以降に設置されたと考えられる石碑の基礎は、墳丘を加工することなく、傾斜に合わせて石材を積み並べただけの簡素なものでした。出土遺物は、近代～現代の陶磁器が中心で、近世陶器が僅かに混じっていましたが、古墳時代の遺物はありませんでした。



山神の石碑 調査前 (南から)



山神の石碑 調査後 (西から)

【石室の調査】

既に完全に失われたと考えられてきた礫床 (れきしょう、大小の礫を敷き詰めた床) が、玄室 (げんしつ) 内



玄室 調査前 (南から)

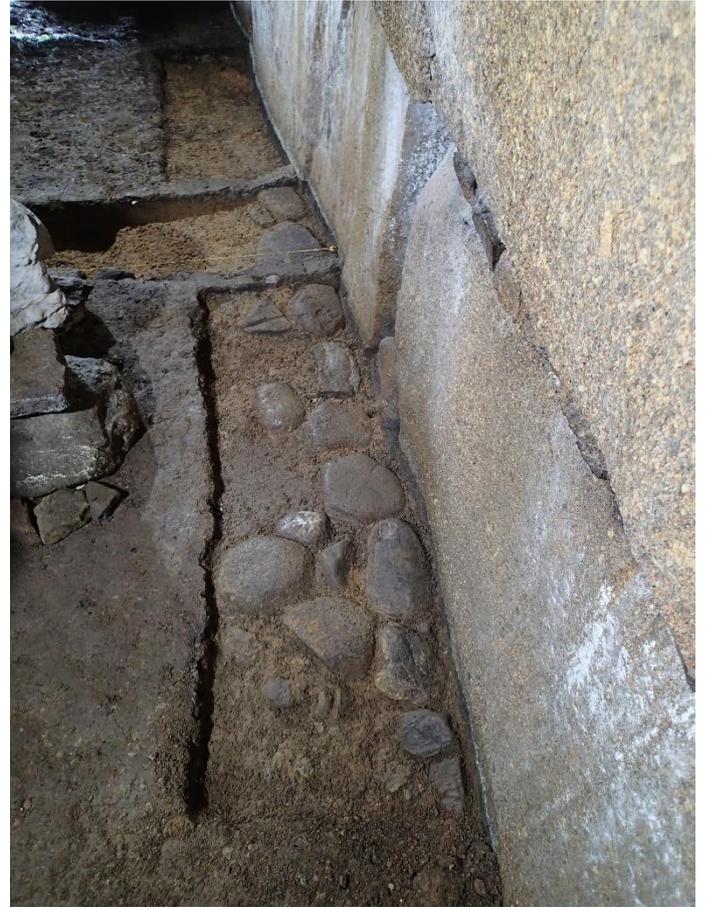


玄室 調査後 (南から)

に部分的に残っていることを確認できました。これが今回の調査の最大の成果といえます。東壁際の残りは良くありませんでしたが、西壁際は比較的良好に残っていました。これによって少なくとも玄室内の礫床は単層構造で、比較的大きめの礫を用いたものであったことが明らかとなりました。



東壁際の礫床（北から）

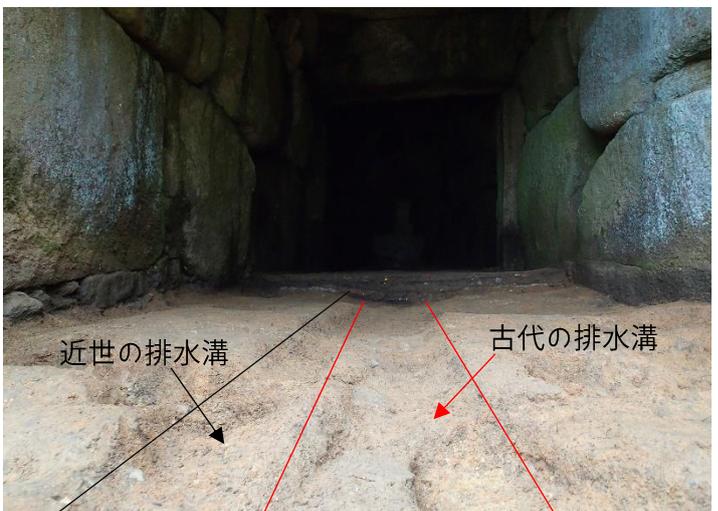


西壁際の礫床（北から）

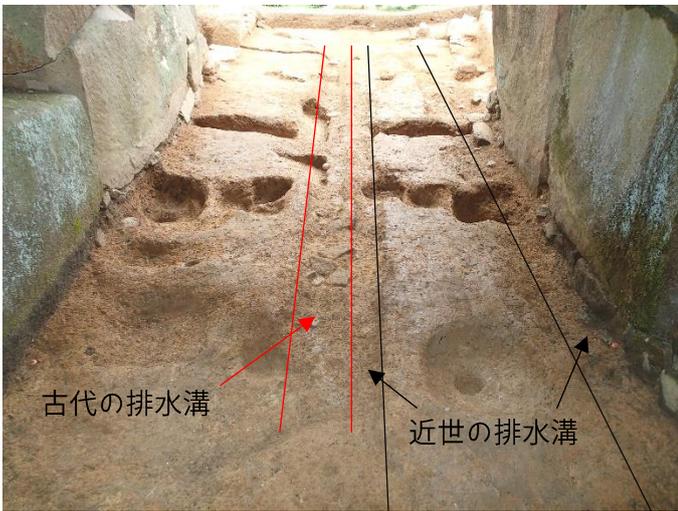
第2の成果としては、羨道（せんどう）から前庭部（ぜんていぶ）へと続く排水溝を確認できたことが挙げられます。近世に作り直された排水溝等によって壊されている部分が多く状態は良くありませんでしたが、構造としては素掘りの溝に礫を充填しただけの簡素な構造だったと考えられます。玄室の調査では排水溝の痕跡が確認されなかったことから、玄室と羨道の境目である玄門（げんもん）付近から始まる構造だったのではないかと推測されます。



羨道 調査前（南から）



排水溝の痕跡（南から）



排水溝の痕跡（北から）



排水溝に詰められた礫の一部（東から）

また、近世における石室の利用状況についても多くの情報が得られました。玄室の一部から羨道にかけての礫床を取り外して灰白色粘土で床を構築する、古代の排水溝を再利用したり、新たに排水溝を設けたりする等、石室内の排水に苦慮している様子や、焚火の痕跡も確認できました。



羨道の堆積状況（南から）



焚火の痕跡（北から）

【前庭部の調査】

前庭部の調査では、羨道から続く古代、および近世の排水溝が、前庭部中央付近まで続いている様子を確認す



前庭部の排水溝（南から）



前庭部の状況（南から）

ることができました。前庭部中央付近以南については、近世の活動によって全体が広く浅い掘鉢状にかく乱されており、排水溝の延長は確認できませんでした。その他、西側壁北半部において石材の一部が検出された以外には、古墳に伴う新たな遺構は検出されませんでした。



前庭部西側壁（東から）



前庭部東側壁（西から）

【出土遺物】

出土遺物は、近世の陶磁器と窯道具が中心で、中世の山茶碗が少量、近代から現代にかけての陶磁器も若干量出土しました。陶磁器以外にも、古銭や煙管等、近世の金属製品もわずかに出土していますが、古墳時代の遺物は須恵器の小片1点と土師器の細片が極僅かのみでした。



須恵器、山茶碗、近世土器



近世陶器

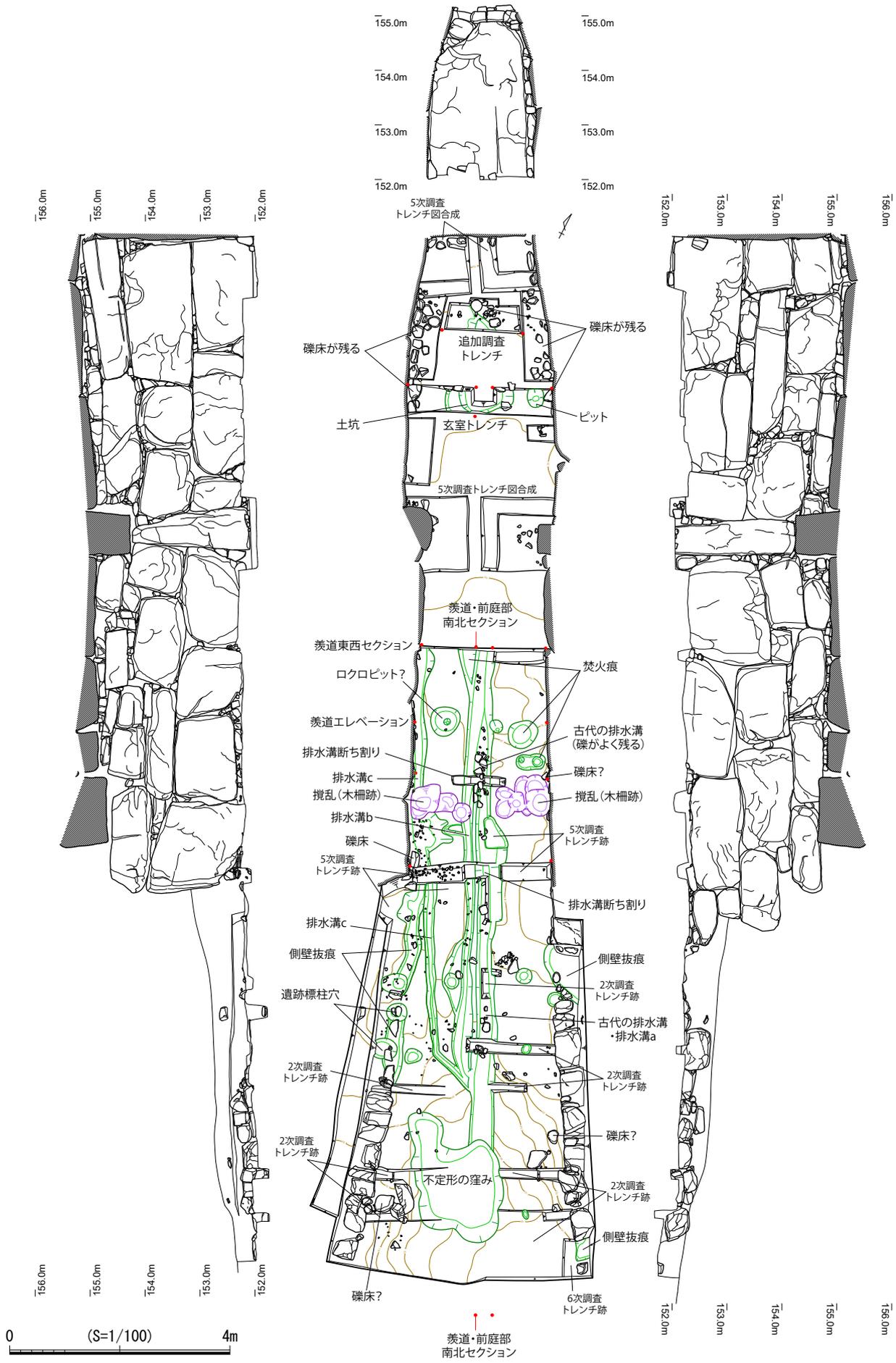


近世窯道具



近代～現代の炆器・磁器等、古銭、煙管

乙塚古墳石室・前庭部 平面図・立面図



【保存整備工事の状況】

乙塚古墳では、石室礫床の復元、前庭部側壁の部分的な復元と、門扉や照明の取り付けが行われました。墳丘では、石室内への漏水対策を施した上で、部分的な整形を行い、墳丘規模が境界石で明示されました。また、見学通路の整備も行われました。



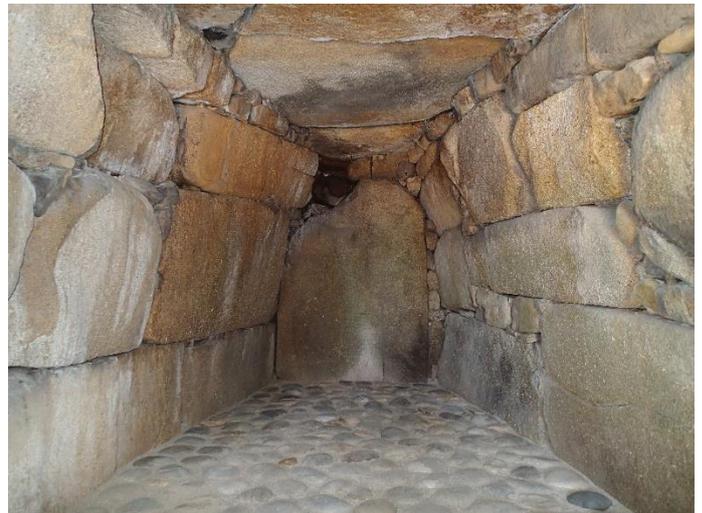
整備工事後の乙塚古墳（西から）



墳丘の整備状況（北西から）



石室入口と前庭部周辺の整備状況（南西から）



復元された礫床（玄室内、南から）

・ ・ ・ 段尻巻古墳の発掘調査 ・ ・ ・

令和2年1月15日から令和2年1月31日にかけて発掘調査を行いました。



調査開始前（南から）



発掘作業の様子（南西から）

【墳丘盛土の除去】

天井石周囲の盛土は、非常に緻密で締りが強く粘性の高い土を用いて念入りに固めた様子がうかがえました。ただし、土を水平な層状に突き固めるいわゆる版築（はんちく）工法が行われているわけではなく、石材周囲を良質な土で固めた後は、礫を含む土を流しかけるように被せて盛り上げていく構造でした。



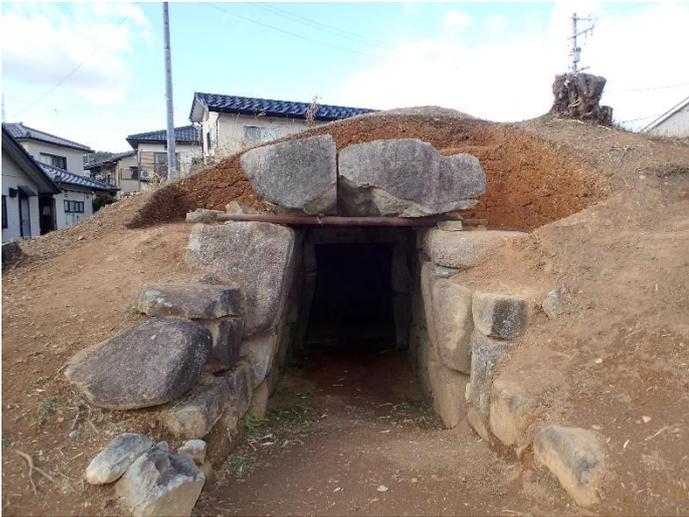
盛土の様子（西から）



盛土の様子（南から）

羨道の割れた天井石は、側壁に載る接地面が少なかったためか、盛土の重みに耐えられず中央で割れたものと思われます。天井石と側壁の間には高さや位置を整えるために比較的平らな石が挟み込まれており、裏込石（うらごめいし）※には石室石材の端材や円礫が用いられていました。裏込石は、天井石と側壁の周囲に念入り、かつ大量に詰め込まれていたわけではなく、盛土を被せる際に石材間の隙間から石室内へ土が漏れるのを防ぐことができればそれでよかったようです。

※裏込石： 石積みの背後に詰められた石。透水性を確保して石積みにかかる土圧を減らしつつ、石と石のかみ合いにより石積みの安定性を増す効果があります。



羨道の天井石の様子（南から）



羨道の天井石の様子（北から）



天井石周囲の裏込石（東から）



天井石周囲の裏込石（西から）

割れた天井石を支える鉄棒は、昭和 40 年代に天井石をジャッキアップして挿入したらしいのですが、記録がなく作業の詳細は不明でした。天井石上の堆積には段差等の明瞭な痕跡が見られなかったため、盛土に明瞭な痕跡が残るほど大きく石材を動かしたわけではなかったようです。折れた天井石をジャッキで支え、盛土の多くが失われていた天井石西側を掘削して、一部の裏込石等を除去しつつ、天井石と側壁の間に挟み込まれた石の厚みと同程度の直径の鉄棒を差し入れたと推測されます。

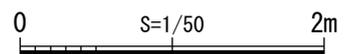
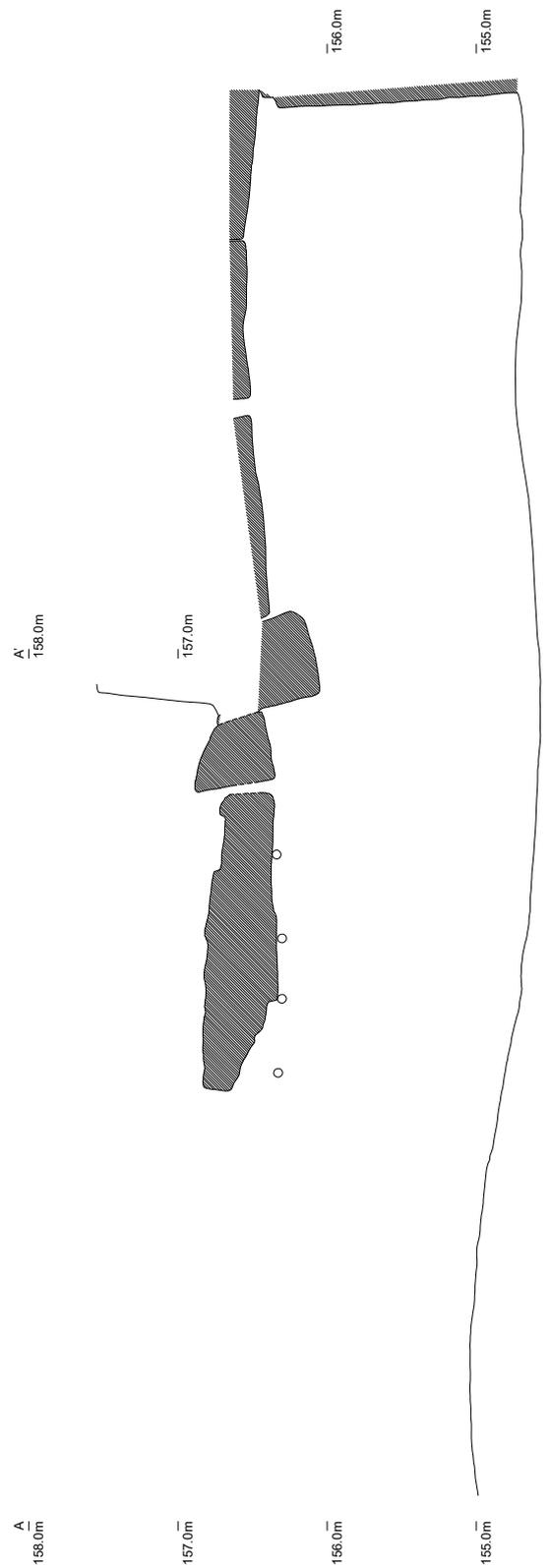
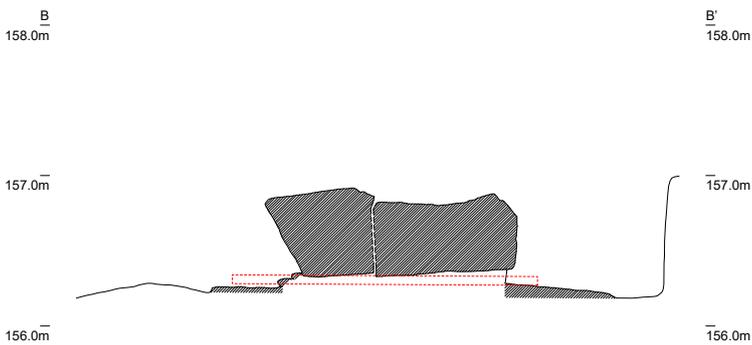
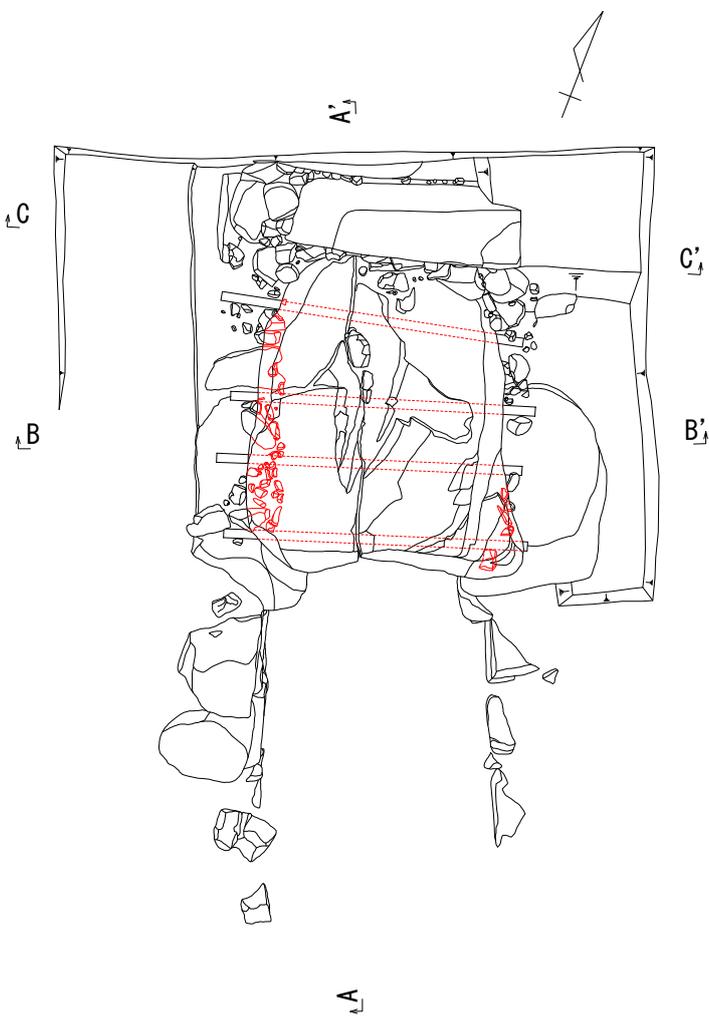
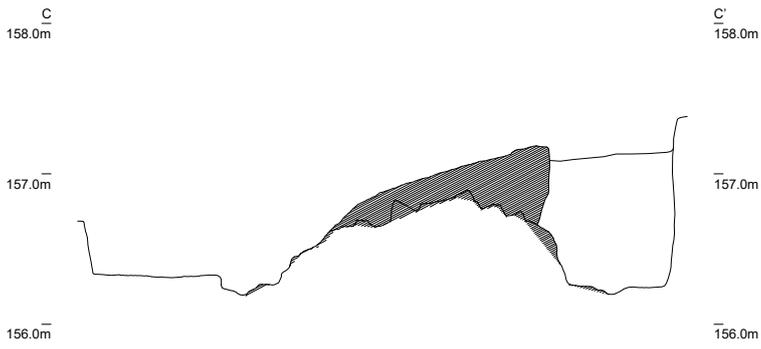


天井石と鉄棒（南東から）



天井石と鉄棒（南西から）

段尻卷古墳 羨道天井石 平面図・断面図



【出土遺物】

遺物は、表層、および鉄棒挿入時のかく乱から出土しました。近～現代の陶磁器と窯道具が中心ですが、近世の陶磁器の他、中世の山茶碗も出土しました。古墳時代の遺物と考えられるものは、極僅かな土師器の細片のみでした。



主な出土遺物



調査終了状況（南から）

【今後の予定】

段尻巻古墳では、天井石の接合・補修と再設置、盛土の埋め戻し作業が終了次第、石室と前庭部の発掘調査を実施する予定です。墳丘の部分的な整形等、乙塚古墳と同様の保存整備工事が進んでいく予定です。

2020年4月15日 土岐市文化振興事業団

※ 両古墳の保存整備事業は、土岐市教育委員会文化スポーツ課が進めています。保存整備事業の詳細については、同課文化振興係へお問い合わせください。

【文化スポーツ課】

TEL: 0572 - 54 - 1111 (内線 358、359)

FAX: 0572 - 55 - 6310

E-mail: bunspo@city.toki.lg.jp